

頂点をきわめた血管外科医が  
求めつづけるのは、本拠地と  
人に喜ばれること。

ドクターの肖像：108

東京慈恵会医科大学外科学講座統括責任者・血管外科学教授

# 大木 隆生

新しい術法は1990年代に欧米で生まれ育ち、我が国での普及はまだ端緒にすぎたばかり。だが、アメリカにおいて同術法の著しい進歩を導き、世界でもこの分野の頂点にいと認められているのは、誇らしくも日本の大木氏である。

彼は、現在もアメリカのアルバート・アインシュタイン医科大学外科学教授を務め(兼任)、2004年から4年連続「Best Doctors in NY」に選出、「Newsweek Japan」では2002年に「アメリカで認められた日本人10人」に、また2006年の同誌では「世界で尊敬される日本人100人」のひとりに選ばれた。これまでに世界13カ国で招待手術を行い、多数の欧米の権威ある外科学会雑誌の編集委員である傍ら、「Endovascular Today」誌の編集委員長も務め、過日は第50回国際脈管学会を東京慈恵会医科大学(以下、慈恵医大)で主宰した。特筆すべきは、これらの榮譽すべてを彼が40代半ばの若さで手にした点だろう。

ここまで読み進んで、疑問を抱く読者がいるかもしれない。「では、なぜ今、彼は日本の大学教授になっているのか?」。大木氏ほどの実力があり、働き盛りの医師ならば、名声を得るにも、経済的にも、アメリカにいたほうが圧倒的に有利だろうと誰もが思う。実際、日本に来て、彼の年収はアメリカ時代の月収とほぼ同額になったそうだ。大木氏自身も「帰国しなければならぬ外的要因は何ひとつなかった」

大木隆生氏から目の前に差し出された円筒形のステントグラフトは、長さにして15センチ以上、直径も3センチはあるだろうか、想像以上に大きい。文字どおり金属製のステントと布でできた人工血管(グラフト)は、実に素朴なつくりで、これをいかにして血管内に入れ動脈瘤の患者を救うのか説明してくれる大木氏の話聞きながら、こんな物体が血管の中に入るのかと感嘆するばかりだった。

つい最近まで大動脈瘤手術のほとんどは、胸や腹を切開して動脈瘤を切除し、その部分を人工血管に置き換える方法が用いられてきた。長期の成績が確立しているものの、侵襲が大きく合併症の確率も高いこの人工血管置換手術の短所を克服する術法として開発されたのがステントグラフト術。脚のつけ根の動脈からカテーテルを入れ、その中にステントグラフトを通して動脈瘤の部位まで運んで開く。ステントグラフトは、金属バネの力によって広がり血管内壁に張りついて固定される。大動脈瘤に内張りをするにより瘤の破裂を防ぐのだ。大動脈瘤が高齢者に多い動脈硬化を原因とするだけに、切開部を小さくでき患者の負担がきわめて少ない術法の出現は、大きな福音

ステントグラフトで  
世界を牽引する  
誇るべき日本人

PROFILE

(おおき・たかお)  
 1962年 高知県伊野町に生まれる  
 1981年 私立晩星学園高等学校卒業  
 1987年 東京慈恵会医科大学卒業  
 1989年 東京慈恵会医科大学附属病院臨床研修修了  
 東京慈恵会医科大学第一外科入局  
 東京慈恵会医科大学大学院卒業  
 1993年 東京慈恵会医科大学大学院卒業  
 1995年 米国アルバートアインシュタイン医科大学血管外科研究員  
 1998年 米国アルバートアインシュタイン医科大学病院血管内治療科部長  
 2002年 米国アルバートアインシュタイン医科大学血管外科部長  
 2005年 米国アルバートアインシュタイン医科大学外科学教授(現在も兼任)  
 2006年 東京慈恵会医科大学血管外科学教授  
 2007年 東京慈恵会医科大学外科学講座統括責任者

と述べる。では、なぜ——疑問は深まるばかりだが、彼には戻る以外の選択肢はなかった。

### 各地を転々としつつ 幼心に芽生えた 「本拠地」への渴望

少々乱暴だが、彼のこれまでの人生は、大きく2つに分けられるだろう。つい最近、現職に就くまでの流転の人生と、それ以降。「流転」の表現はオパーに聞こえるかもしれないが、大木氏は、どこが自分の落ち着くべき場所なのか分からないまま、必死で「本拠地」探しをつづけてきた。

「僕の流転生活は日本に生を受けて産声を上げた瞬間から始まっていたように思います。母の実家は高知県にいたのですが、次男の僕が生まれる際、祖父が、「長男は東京で育てているのだから、次男は高知で産み、高知に置いていけ」と、旧家の家長ならではの強権を発動した。3歳のときに、さすがに不憫に思った両親が引き取りに訪れ、東京へ転居して5歳までは東京に住みました」

しかし、それは流転生活のほんの序章。商社マンだった父について小学校入学のタイミングにはロンドンへ。言葉もわからない子どもたちの中に放り込まれてもみくちゃにされた。4年半後にはブリュッセルに転居、フランス語の学校に入れられてゼロから再スタート。その後は、ベルギーとイギリス

の食い違いから一般外科に転向し、今度は身近にいた先輩の姿に憧れ、呼吸器外科を専攻する希望を出しました。でも、定員オーバーで教授に断られてしまった。その様子を見ていた血管外科医の先輩が、いっしょにやらないかと誘ってくださったのです。先輩の気持ちがあうらしくて、何もわからないまま、まさに二つ返事で専門を決めました。とにかく外科系であればなんでもいいと、流れに流れて行き着いたのが血管外科でした」

しかし、血管外科を学び始めると共に、大木氏は将来に横たわる運命の皮肉の存在を知る。同科を真剣に学ぼうとするなら、決して離れないと心に決めた日本、最後の本拠地と決めた母校慈恵医大を離れなければならなかったのだ。

「血管外科は、日本ではまだ診療科として独立もせず症例数も少なかった。たとえば、頸動脈の内膜剥離術の手術症例は日本全国でせいぜい年間500〜600例でしたが、アメリカでは15万例に達していた。血管外科では、とにかくアメリカがナンバーワン。いかに海外嫌いの僕でも、アメリカで学ぶ以外に道はなかったのです」

泣く泣く図書館に行き、どこに留学するか探索を始めました。ちょうどアルゼンチンのパロディ氏が世界初のステントグラフトの論文を発表したばかりで、どうせ行くなら海のものとも山のものともされない分野を手がけようと考えた。調べていくと、アルバートアインシュタイン医科大学にパロディ

の都市を転々としながら中学生になるまで合計8回の転校を繰り返す。言葉と環境の変化は、感受性豊かな幼少期の子どもにかなりのストレスを与えたのだろう。必然のように彼の中には本拠地を渴望する気持ちが芽生えた。「中学2年のとき帰国が決まったのですが、僕の心の中ではベルギーが本拠地になりかけていた時期で、「いい加減にしてくれ、ここにいたい。ベルギーを自分の本拠地にしたい」と、主張しました。結局、父に「これが最後だから」と説得されたのですが、説得を受け入れると同時に心に決めました。もう絶対に動かない。僕の本拠地は、日本なのだと」

### どうしたら人に 喜んでもらえるのか 探しつづけた半生

「振り返れば、僕の半生は、本拠地と『どうしたら、人に喜ばれるか』を探す日々だったように思います」

微笑み交じりに自らの歩みを総括するが、10代の少年が本拠地を探す姿は悲壮と言えなくもない。大木氏は、特殊な境遇の中で、葛藤と自己分析を繰り返した結果、医師の道を選んだように感じられる。

「小さいころ僕の家は、たぶん経済的には恵まれていました。高知の実家は元造り酒屋で、祖父も伯父も政治家。父は総合商社の重役で、ヨーロッパ赴任時代の車は運転手つきのロールスロ

氏が行き、アメリカで第1号となるステントグラフト術を行ったという。ならば、アルバートアインシュタインしかない。とてもシンプルな動機で行き先を定めました」

### 珍道中の末に アメリカでの 学びの場を確保

抵抗感を持ちつつも、ひとたび覚悟を決めてからの行動は速く、精力的でもあった。大木氏は、ロサンゼルス/ UCLAで若手外科医対象に1週間の講習会が開催され、自分が属していた血管外科症例検討会から若手医師3名が選出されるのを知り、留学のコネクションをつくろうと応募、首尾良く参加メンバーに選ばれる。

そして、その講師陣の中に血管外科の論文で何度も目にしてきた「アルバートアインシュタイン医科大学/ピース教授」の名前を見つけ、大胆にも直談判して彼の研究室に入れてもらおうと計画した。

「論文には、名前はあっても写真は掲載されていません。いったい誰がピース教授なのか分からない。眼を皿のようにしてプログラムを眺め、「よし、こいつがピース教授だ」と確認して待ち構えました。狙いは講演後です。ところが演壇を降りた教授は、あつという間に他の受講生に取り囲まれてしまった。本場のスターだったのですね。群衆に交じった東洋人が、教授に話し

イス。いつも日本から来る政治家や著名人を招き、食事をしたりパーティーを開いたりしていました」

大人に交じって華やかな世界に触れながら育った早熟な少年が自分の将来像を探し始めたとき、思い浮かんだのは「楽しい仕事」。そして、自分は何をしたら楽しいのかを突き詰めてみると、人に喜ばれる、人の役に立つことだった。

「当時通っていた晩星中学の先生に人に喜ばれる職業を問うと、『窮地を救ってくれる弁護士か医師』と言われ、僕は、瞬間、医師になろうと決めました。しかもメスを握って己の技量で治せる外科医になろうと決めた。子どもだったんです(笑)。それからは左手でお箸を使ったりと、子どもながらに外科医をめざして懸命でした」

経済的に恵まれた境遇が、同時に満たされた境遇とは限らない。本拠地を渴望しつつ、「人に喜ばれる」ことを仕事に求める大木少年の心。そこに本人にしかわからない虚空があったと推測するのは考えすぎか。

### 流れに流れて 行き着いたのが 血管外科の世界

大木氏は「人に喜ばれる」道をめざして慈恵医大に入学、専門には紆余曲折を経て血管外科を選ぶ。

「最初は、整形外科医を志して2年間をすごしましたが、上司との外科医観かけの隙などありませんでした」  
 もちろん大木氏は、諦めない。エレベーターに乗り込み、ホテルの部屋の前までついて行く。

「日本から来た大木と申します。無給でかまいません。勉強をさせてください」と頭を下げたのですが、慌しく「すぐにシカゴに旅立つので荷づくりしなければ。明日シカゴで講演が終わったら話そう」と言われました」

勇躍、米国外科学会が開催されていたシカゴへ飛び、再びピース教授の講演が終わるのを待ち構えると――。  
 「やはり、教授は人垣の中で(笑)。タクシー乗り場でやっと捕まえると「これからニューヨークに帰る。明日、そこで話そう」。心の中で舌打ちしました(笑)」

世界的な外科医がつきまといってくる相手に対して言った「明日会おう」は「たぶん、君がわざわざ足を運べるところではないだろうが」が織り込まれた拒絶だったのかもしれない。ただ、頼むべき相手の顔も知らずに海を渡る行動力を持った東洋の青年は、その程度でアプローチを終わらせたりはしなかった。

「シカゴの宿へ戻り、すぐに翌朝、朝いちばんのニューヨーク行きの飛行機を予約しました。そして、アルバートアインシュタイン医科大学でやっと教授と面会。依頼の主旨を説明すると、『なんだ、無給ならもちろん、ウェルカムだよ』。最初からそう言っているでしょうという言葉は、飲みこむしかなかったですね(笑)」



小学校6年ときの大木家。プリュッセルの自宅で(右端がご本人)



大学時代に所属するテニス部が3部リーグで優勝して2部リーグ昇格が決まったとき。「今でも人生でもっともうれしかった日」(中央、上半身裸で立っているのがご本人)



医学部5年生のとき、同級生と



アメリカ初の塞栓防止フィルターを用いた頸動脈ステントを成功させた際のテレビインタビュー



アルバートアインシュタイン医科大学でのレジデントに対するベッドサイドティーチング。レジデントも学生も真剣そのもの



第108回日本外科学会(長崎)での東京慈恵会医科大学外科同門会で。皆さんの笑顔からも慈恵医大外科が盛り上がっていることが見てとれる



大学時代に熱中した硬式テニス



華やかだった両親の交友関係



まだ無給研究員だったころ奥様の美佳さん、長男の将平さん、長女の理世さんとニューヨークのセントラルパークで。「貧しかったけれど幸せな日々でした」



アルバートアインシュタイン医科大学で率いていた血管外科グループ。ニューヨークらしく人種のるつぼであることが見てとれる



世界初となる動脈瘤用のワイヤーレス圧センサーのデータをアメリカの学会で発表



症例数日本一を達成した現在の慈恵医大血管外科チーム。「彼らを含め、慈恵医大外科の医局員を外科学のリーダーにすることが、僕の使命であり夢です」

笑われては当人の立つ瀬はないだろうが、珍道中の末に大木氏のアメリカにおける学びの場は確保された。1995年、急ぎ心を寄せる女性と結婚し、挙式の20日後にはニューヨークの新居へ。立場は無給医なので当然住まいは安アパート、荷物はスーツケース2つだけという貧しい新生活がスタートした。

### 高まる評価とは 関係なく募っていった 祖国への思い

「僕は、ゴルフでも、テニスでも、高校時代に熱中した柔道でも、人に教わるより独学で試行錯誤する性分。中途半端に教わると、独自の発想が鈍くなるような気がします。ただ、医学、特に外科学にあつては、試行錯誤するわけにもいかず、アメリカで学ぶしかないと思いました。」

しかし、いざ学びの場に身を置いてみるとバイパスや頸動脈内膜剝離術などの外科手術のレベルは高かったが、アメリカのステントグラフトは思ったほどではないとわかりました。「なんだ」という感じでした(笑)。そこで自分の流儀に従って、組織の最下層が任される実験動物の世話などをしながら、まだ稚拙だったステントグラフトの改良に取り組みました」

とはいえ最初は、無名の東洋人で誰にも相手にされなかった。底辺から出発した大木氏は半年間、沈黙を守る。

「僕が初めて会議などで発言をしたのは、アメリカに行つて半年をすぎたころ。相手は花形血管外科医たちです。半年間は1回も発言できませんでした。周囲の人も僕には挨拶もしてくれませんでしたし(笑)。6カ月目にカンファレンスで『あの……すみません』と発言すると、みんなが『おおつ、大木がしゃべるよ』と振り返った。みんなが驚いて僕に注目した光景が脳裏に焼きついています」

以降、ステントグラフトの独自改良や破裂性大動脈瘤への世界初の応用、頸動脈ステント術の塞栓防止フィルターやワイヤーレス動脈瘤圧センサーの開発などヒットを重ねるうち、大木氏への評価は高まっていく。だが、高まる評価とは関係なく、彼は本拠地と決めた日本と母校慈恵医大に早く帰りた」と願っていた。

「1年たったころ、慈恵医大から帰国の打診がきました。血管外科の通常の手術も見学し尽くし、ステントグラフトの勉強に來たけれど僕のほうがいいものをつくれるとわかったので、ピース教授に帰国の意向を伝えた。すると数日後に映画『ゴッドファーザー』のセリフをまねて『I will give you an offer that you cannot refuse』と言います。『あまりに好条件で断れるはずのないオファー』とはどんなものか——身構えてつづきの言葉を守つと、

「月10万円の給与だ」でした(笑)。でも、妻に告げると、「すばらしいじゃない」と喜んでくれた。確かに無給から有給になったのだから、たいへ

んな進歩です。とりあえずはアメリカで評価を勝ち取った記念程度の気持ちで、半年帰国を延ばしました」

結局、その後1年いて、いくつもの新しい手術や器具を開発。ますます大木氏の評価は上がつていく一方だったが、当然、再度、慈恵医大から帰国要請がきた。今度は「留学に際し大学の援助金を受けているのだから、帰国しないなら慈恵に辞表を出してもらおう」とのただし書きがついて——。

「やつと見つけた本拠地である慈恵医大を手放すわけにはいきません。迷わず帰国の意思を固めました。すると、今、大木に抜かれるのは困ると言われ、また『I will give you an offer that you cannot refuse』です(笑)。次は月給20万円くらいかなと思つていたのですが、僕の眼前に提示されたのは、合衆国の医師免許と永住権と年取2500万円、秘書つきの講師という破格の条件でした」

本拠地への帰還は大木氏の切望。しかし、両親から怒気さえこもった反対を受ける。

「日本に帰つたら何が待っているというんだ。無給医で生活はアルバイトで支えるのだろうか。女房も子どもいる立場で、己の志とか、気持ちとかを振りまわすのはやめろ。これには参つた。慈恵医大への辞表を書いたときの喪失感は今でも鮮明に覚えていますし、後の原動力にもなりました」

意外なところから説得の手が伸びなければ、このとき彼は間違いなく帰国してははずだった。

## 人間はつまるところ衣食足りて

### 「ときめき」を求める

「アメリカンドリーム」と、よく言われる。実力主義のアメリカでは、力ある者はどこまでも上っていていけるチャンスがあることを意味する。大木氏はアメリカンドリームに憧れて海を渡ったわけではないが、結果的に彼の身にはアメリカンドリームが舞い降りた。

断腸の思いで、母校の慈恵医大に辞表を提出した大木氏。以降10年、講師から助教授、教授へとステップを上がり、前出の大スター、ビース教授の後継者の地位に同大最年少記録で就く。アメリカで屈指の血管外科施設の教授となり、年収は円換算で1億に届き、無給医時代の上司たちを全員自らの部下に。絵に描いたようなアメリカンドリームを成し遂げたのである。

ただし、彼のアメリカンドリームは結局のところ10年ほどで終焉した。慈恵医大の血管外科の教授選出馬の要請を受け入れ、帰国したのだ。辞意表明には当然のごとく、さらに好条件を用意しての引き止めがあったが、このとき大木氏は交渉のテーブルそのものに着きさえしなかった。

「アメリカにとどまると決めた瞬間から予想していたのですが、仕事が充実し、社会的評価が高まり、収入が増えれば増えるほど、虚しさは膨らみまして。自分はいったい今、何をしている

のか」。

高い地位と億に近い収入を得て確信したのは、人間は地位やお金で満足は得られない、衣食足りて「ときめき」を求めるのだということ。自分がときめくのは、本拠地で人に喜ばれる仕事をしたとき。アメリカは、どう考えても本拠地ではなかった。アメリカで手術によって快癒した患者から感謝の言葉を贈られても、日本人だったらもつと良かったのにと感じてしまう。アメリカでは大勢の後進を育ててきましたが、これが母校の後輩だったらと感じていました。それに、高額な報酬を得るようになって、渡米時に借りたアパートに12年間住みつけ、贅沢をしませんでしたので、高収入を得ているありがたみもありませんでした」

一度は親族からの反対で鞘に納めた「本拠地探しと人に喜ばれること」。しかし、母校の危機を知るにいたり、思いを蓋をしつづけるのはもはや無理だった。2003年ごろ、慈恵医大青戸病院事件や科学研究費の不正流用疑惑など、メディアでは慈恵医大のスキヤンダルが連日のように取り上げられ同大は社会から叩かれていた。

「我が本拠地、慈恵医大」のピンチ。外科学講座においても求心力が失われ人が辞めている状況をかっつての同僚や後輩から聞かされるとともに、危機打開のために血管外科の教授選に出てほしいと求められれば、黙っていられるわけがない。

「慈恵医大での年収を知って腰が抜けました(笑)、他人の赤ちゃんのべたならば一生面倒を見ようとの大木氏の確たる方針が、大きく影響しているであろう。

さて、大木氏はやっとなどり着いた本拠地で、これから何をしようと考えているのか。

「近年、世界はアメリカを中心に動いているように見え、残念ながら日本にも否応なく彼らの考え方、価値観が入り込んでいます。

資本主義の宿命とも言えますが、アメリカは、すべての側面で短期決戦の国。そのため、企業においては成果主義、経済的インセンティブで社員に競争をさせ、近視眼的な成果を求める。その結果、社員同士の連帯感は薄れ、個人主義がはびこる。社員は評価対象とならない仕事からは「Not my job」と言っ手を引き、組織への帰属意識の薄れも手伝い、会社を転々とすることでキャリアアップを図ります。

このように本拠地を持たない社会、自己中心がまかり通る社会がアメリカです。人間の普遍的な欲望は人から感謝されることなのに、彼らは短期決戦で富を得るのと引き換えに、仲間からの感謝や社会への貢献による満足感を捨ててしまった。ですから経済的に恵まれていても、アメリカ人で本場に幸せで、心穏やかに暮らしている人は驚くほど少ないのです。

個人の利害関係でつながっているゲゼルシャフトたるアメリカ。その集団の虚しさを知っているからこそ、利害とは無縁の友愛をベースにつながつているゲマインシャフト、いわば村社会

ピーシング(外国人の治療や育成)をして高額な収入をもらおうのと、年収は10分の1でも我が子(日本の患者や慈恵の後輩)の育児をするのと、どっちにやり甲斐を感じるか? 収入が減ったと言っても衣食は足りる。帰国を決めるのに、迷いはありませんでした。アメリカの大学は、お金は積めても僕に祖国と母校は与えられません」

## 人間の持つ普遍的な欲望は、人から感謝されること

2006年、当時43歳の大木氏は前職同様、慈恵医大の臨床系教授としては最年少で同大の血管外科教授に、そして翌2007年には消化器外科や呼吸器外科などを含む6診療部、医局員200余名を擁する東京慈恵会医科大学外科学講座統括責任者(チェアマ)に就任。足かけ2年で同大の血管外科を躍進させる。30ある診療科のうち、就任時に診療報酬ベースのランキングで最下位であった同科は一気にトップへと躍り出た。もちろん手術件数でも圧倒的な日本一を誇る。また、並行して胸部大動脈瘤に対する枝つきステントグラフト術や下肢閉塞性動脈硬化症用の薬剤溶出ステント術など数多くの本邦初となる手術も成功させた(詳細は、慈恵医大外科ホームページ <http://www.jikeiurgery.jp>)。

「日本はアメリカの10年あとを追っている」と言われますが、疾病構造にお

を、慈恵医大の外科講座で形成していきたいと思っています。それは、アメリカの指向する物質主義や個人主義に対する僕のアンチテーゼであり、生涯を懸けて求めるものでもあります。

医療は公共財。経済的インセンティブはなじみません。そんな医療の世界で働く者には、――互いを慮り、悲しみや喜びを分かち合う、強い者がそうでない仲間をかばう、構成員が心から組織の発展を願う――「村社会」がいつ必要だと確信します。損得勘定抜きの村は無敵大のパワーを発揮しますし、何より個々の構成員を幸せにします。

まず、慈恵の外科でめざす村づくりを試み、次には慈恵医大全体で――。いつしか日本全体がひとつの村になってほしいと願います」

幼少期から各地を転々とし、渴望しながらも本拠地にとどまることは許されなかった。経済的に大いに恵まれたときもあったが、バブル崩壊で実家が財産を失った。アルバートアインシュタイン医科大学では日本人がたったひとりの中、無給医から這い上がって教授にまで上りつめ、世界的な血管外科医になった。後に、約束された富と名声を捨て、本拠地と定めた日本に戻ってきた。